

帰ったあとに従事しなければならない発掘調査に関する実地研修を望む声が多くあります。例年出される要望であり、関係者はそろそろ対応を考えねばならない時期にきていると認識しています。

発掘技術者研修「保存科学課程」

5月22日より6月6日の16日間にわたり、保存科学課程の研修をおこないました。参加者は、青森県から鹿児島県まで総勢13名です。保存処理の担当に抜擢された方、日頃の発掘調査業務に保存科学の知識を生かしたい方、保存科学全般について概略を学びたい方など、参加の動機は様々です。

研修内容は、保存科学の基礎から実際の材質・構造調査、保存処理、保管環境、現場における応急処置を含むフィールドワークです。この現地実習は平城宮跡発掘調査部の協力を得て、興福寺中金堂の発掘調査現場においておこなうことができました。また、保存科学における写真記録の重要性を理解して



発掘現場での実習風景

もらうために、写真室の協力を得て、写真撮影実習も併せておこないました。

2週間という限られた短い期間の中では、取り扱う内容が多岐にわたることから、スケジュール的にもかなりハードな面があります。しかし、保存科学についての講義・実習を一通り体験することで、発掘現場での応急処置や遺物の取り上げ方、保存処理の概要について理解が深まり、基本的な技術の習得がなされたものと思われます。研修生からは、発掘調査における保存科学の果たす役割や保存処理の重要性に対して認識が新たになった、これまで手を出せないでいた遺物の保存処理を自前でおこなう、あるいは自前でできなくても外注する際の留意点を整理し、仕様書を作成することに大きな一歩を踏み出

せたとの声が聞かれました。本研修は一応の成果をあげることができたものと思われます。

研修終了後、各々の任地に戻った研修生からは、遺物・遺構の保存について、それぞれが抱える問題に関する問い合わせを受けたりしています。また、研修生間の情報交換も頻繁におこなわれているようです。研修生が、それぞれ自分のできることから動き出している状況を見て、本研修を担当した者としての安堵と喜びを感じている次第です。

(埋蔵文化財センター)

博物館実習生の受け入れ

昨年度からおこなっている博物館実習生の受け入れも2年目をむかえました。今年度は9月3日（月）から7日（金）までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。



博物館実習風景

実習生はそれぞれ奈良女子大学から2名、帝塚山大学から4名、滋賀県立大学と広島大学から各1名の計8名と昨年度の5名に比べると、少し増加しています。徐々にではありますが、当館が博物館実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されつつあるのでしょう。

実習は、展示品貸借の実務、展覧会の実施について、博物館における展示解説、展示解説とマルチメディア、建築史概説と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品貸借の実務」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調

査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

「建築史概説」では、実習生の全員が建築学とはまったく関連のない学部に所属していることから、まず飛鳥時代における伽藍配置の推移を説明し、山田寺金堂復原模型を用いて飛鳥時代建築における細部の様式および特徴、部材の名称、奈良時代建築との違いなど簡単に講義しました。これをもとにして、演習では建物がどのように組み上がっているのかを自分の目で確かめてもらうために、復原された山田寺東回廊の展示部分のスケッチをおこないました。このような経験は大学ではほとんどないらしく、てこずる実習生もいました。

今年度の博物館実習が実習生にとって有益なものとなったかは现阶段ではわかりません。しかし、少なくとも飛鳥時代に興味をもってもらうことはできたように思います。実習生の受け入れは、来年度も引き続きおこなわれます。はたして、次回は実習生が何人来るのでしょうか。（飛鳥資料館）

研究会の開催

古代瓦研究会第5回シンポジウム

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、日本最古の寺院である飛鳥寺（588年創建）の瓦を皮切りに、古代の瓦を製作技法の面から見直そうという試みをつづけています。1998年以降、それに関わる4回のシンポジウムを奈文研で開催しましたが、6月23・24日の両日には、会場をはじめて千葉大学に移し、山田寺式軒瓦の東国への展開をテーマに、研究報告と討議



シンポジウム会場全景

をおこないました。

会場には、各地の寺院出土瓦を持ち寄っていたいただき、実物を前にして活発な意見が交わされました。こうした積み重ねにより、従来、文様に偏りがちであった瓦研究に、新たな局面を切り開くことを期待しています。あわせて、開催にあたりご協力いただいた関係者・関係機関にあつく御礼申し上げます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

研究室紹介

歴史研究室（文化遺産研究部）

奈文研発足当初に、南都諸寺社の文献史料部門、考古部門の調査研究を目的に設置された歴史研究室は、考古部門が1964年に分離して以降、定員1名と併任数名の体制で、南都の諸大寺や大社が所蔵する書跡資料の調査、研究を継続してきました。

そしてこのたび、奈文研の独立行政法人化に伴い、新しく設置された文化遺産研究部の1研究室（定員2名）となり、建造物研究室、遺跡研究室とともに、文化遺産についての総合的な調査研究をおこなうこととなりました。

世界遺産条約の文化遺産の定義には、書跡資料の類は含まれていませんが、我が国には、世界でも稀に古くからの書跡資料が数多く遺存しています。そこに、文化的知的財産としての文化遺産を、よりトータルにとらえる調査研究体制ができたことは大きな意義があるのではないのでしょうか。

歴史研究室は、歴史資料を主たる調査研究対象としておりますが、そのなかでも文字が書かれている資料を中心に、従来から継続的に調査してきました。南都、すなわち奈良には、東大寺をはじめ数多くの古くからの大寺があります。そこに所蔵されている



北浦定政関係資料(大和国坪割細見図 天理市北部付近)